

【短報】 デジタル時代の「アダム・スミス文庫」

資料の「研究」と「管理」を繋ぐために¹⁾

矢野 正隆

東京大学経済学図書館が所蔵する「アダム・スミス文庫」は、18世紀スコットランドの著名な学者であるアダム・スミスが生前に収集した蔵書の一部（314冊）である²⁾。このコレクションの学術上の重要性は、内外に広く認知されているが、逆に、その希少性故の保存・管理上の問題により、長い間、誰もが随時アクセスできるとは言い難いものであった。

そうした状況が一変したのは、2010年代以降のことである。本誌4号において詳細を報告した通り、日本学術振興会の科学研究費補助金（研究成果公開促進費）により、この「アダム・スミス文庫」を含む、東京大学経済学図書館が所蔵する主に18世紀以前の西洋古典籍について、「西洋古典籍デジタルアーカイブ」と銘打ち、デジタル画像の作成・公開が開始された³⁾。さらに、これを契機として、西洋史学・経済思想史の研究者を中心とする共同研究「デジタル資源を活用したA・スミス経済思想の多元的学際的構造分析の新たな試み」がスタートした⁴⁾。ここでは、本誌でもその活動の一端を伝えるように⁵⁾、内容読解を重視する歴史研究と、管理に重きを置く図書館や図書館情報学という、2つの立場から、「アダム・スミス文庫」の有するポテンシャルを、如何に有効に引き出すかを、主要な課題としている。

この課題に対する、一つの手がかりとして、本共同研究では、この蔵書群の目録に注目している。スミスの没後、その散逸した旧蔵書を再構成するために、数度にわたって目録が作成されてきた。ジェームズ・ボナー⁶⁾、矢内原忠雄⁷⁾、水田洋⁸⁾

といった碩学達の手になる目録は、それぞれ特色を持つ労作であり、今日でもまず紐解くべきものとして参照され続けている。一方、東京大学経済学図書館の「西洋古典籍デジタルアーカイブ」は、そのインターフェースとして東京大学 OPAC を採用していることから、上記の目録とは独立に、そこで採用されている形式（国立情報学研究所 (NII) の NACSIS-CAT に準拠）に沿った書誌データを作成し、図書館での蔵書管理はこれに拠っている⁹⁾。つまり、この蔵書群に対して、それぞれの関心・意図に従って、様々な目録が作成されてきたのである。

しかし、一般論としても言えることであるが、「研究」に偏した目録は、「管理」的立場からは、煩瑣でありながら必須項目が欠けるように見られ、一方、「管理」的な目録は、「研究」的立場からは、簡易に過ぎるように見られることになる。こうした状況は、一つには、「研究」にせよ「管理」にせよ、紙ベースで行われていたことの名残であるとも言える。つまり、両者の相違は、それぞれ直接に目的とするところ以外については、極力省略する方針で目録が作成されてきたことを示している。逆に言えば、このような紙ベースであればこそ双方にとって不満に思われた部分も、現代のデジタルを中心とする環境では、ある程度解消することが可能ではないかと予想される。

さらに言えば、ここでは仮に「研究」と「管理」を二つの異なる立場として掲げたが、改めて双方の目指すところを見直してみれば、この両者は必ずしも対立するものではないことがわかる。資料

「研究」の目的とは、要するに、資料からより多くの情報を引き出すことであろう。そのためにもっとも必要なことは、その資料により多くの人により長い期間にわたってアクセスできることであるはずである。一方、資料「管理」側の最大の課題とは、まさにその「より広範で長期間のアクセスの保証」であることは誰もが認めることであろう。この課題に応えるためには、モノとしての資料の寿命に限りがある以上、資料のどの部分にどのようなタイプの情報を見出し、そのうちのどのタイプの情報をより優先的に残すのか、という判断は、いずれ必ず求められることになる。つまり、「管理」のためには「研究」的な情報の読み取りは不可欠なのである。

本共同研究では、こうした現状認識を踏まえて、それぞれの立場から新しい目録の在り方を模索している。

「研究」的立場からは、デジタルヒューマニティーズ¹⁰⁾の手法を援用した時に、どのような情報を盛り込むことが可能なのか、そのための方法論について議論を進めている。その成果の一部は、既に、経済学史学会および日本西洋史学会の2016年度大会にて報告している¹¹⁾。一方、「管理」的立場からのアプローチとしては、既存のNACSIS-CATデータを、RDA (Resource Description & Access) フォーマットに修正した。これは、図書館蔵書目録を、研究利用も含めたより広範な情報探索ツールにするための試みである。この事例の詳細については、本誌岡田報告に譲る。

【附記】本稿は、JSPS 科研費 26590031 による研究成果の一部である。

(やの まさたか：東京大学大学院経済学研究科助教)

-
- 1) 本稿は、本誌岡田報告への補足説明を意図して草されたものである。
 - 2) 山崎覚次郎「新渡戸教授より寄贈せらるアダム・スミス遺愛の図書」『経友』2, p.1-3, 1921.2
 - 3) 「特集 アダム・スミス文庫とデジタルアーカイブ」『東京大学経済学部資料室年報』(以下『年報』) 4, pp.1-15, 2014.3.
 - 4) 2014-2016 年度科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究 課題番号: 26590031 代表者: 小野塚知二・東京大学教授
 - 5) 有江大介「覚え書き わが国のアダム・スミス研究の特色：水田洋氏の業績と *Adam Smith's Library: A Catalogue* (2001) から見て」『年報』4, p.16-24, 2014.3. Philip Schofield, Tim Causer. Jeremy Bentham and the Computer Age : Reflection on Crowdsourcing the Transcription of Handwritten Documents. 『年報』5, p.2-19, 2015.3. 森脇優紀「2014 公開ワークショップ デジタル・ヒューマニティーズの最前線と経済学史研究」参加記『年報』5, p.20-22, 2015.3.
 - 6) Bonar, James. *A catalogue of the library of Adam Smith : author of the "Moral sentiments" and "The wealth of nations"*. Macmillan, 1894 (2nd ed., 1932).
 - 7) Yanaihara Tadao. *A full and detailed catalogue of books which belonged to Adam Smith : now in the possession of the Faculty of Economics, University of Tokyo, with notes and explanations*. Iwanami shoten, 1951.
 - 8) Mizuta Hiroshi. *Adam Smith's library : a supplement to Bonar's Catalogue with a checklist of the whole library*. Cambridge University Press, 1967. Mizuta Hiroshi. *Adam Smith's library : a catalogue*. Oxford University Press, 2000.
 - 9) 前掲注3 特集記事中の矢野正隆「西洋古典籍デジタルアーカイブ」の特徴と利用法」参照。
 - 10) 紙媒体の特性に依拠した方法論を発達させてきた人文学が、デジタル媒体を基軸としてその方法論を再構築しようとする研究動向を指す。
 - 11) 経済学史学会第80回大会セッション「東京大学『アダム・スミス文庫』の新カタログ作成ーデジタル資源を活用しつつ」(2016年5月21日、東北大学)、第66回日本西洋史学会大会小シンポジウム「デジタル資源を活用した資料の共有化とこれからの西洋研究への展望」(2016年5月22日、慶應義塾大学三田キャンパス)